

智顓著作における一心三観説の研究

## 智顓著作における一心三観説の研究 『三観義』と『維摩経玄疏』「三観解釈」の比較対照を中心に

### A study on the theory of “simultaneous triplet contemplation in one time” in Zhiyi’s Works: With special reference to a comparison of the *Sanguanyi* and “Sanguan jieshi” in the *Weimojing xuanshu*

文学研究科人文学専攻博士前期課程修了

野原耕平

Nohara Kohei

#### 研究の目的

天台智顓（538-597）の三観説は、従仮入空観・従空入仮観・中道第一義諦観という三段階の観法のことであり、それらを一念のうちに同時に観ずることを一心三観と言う。空から仮に入り、仮から空に入り、空・仮の二観を共に観ずることが中であり、三観それぞれが他の二観を具えており、一心三観によって、仏の智慧が得られるとする。智顓の実践論・真理観において大きな位置を占める教説である。

智顓の三観説は、瓦官寺に居住した時代（陳光大二年 568 年～陳太建七年 575 年）に成立した『釈摩訶般若波羅蜜覚意三昧』に見られ、その後の天台山に隠棲した十年間（陳太建七年 575 年～陳至徳三年 585 年）に成立した『法界次第初門』、『修習止観坐禅法要』（以下、『小止観』と表記）などで展開され、三大部と称される『法華玄義』、『摩訶止観』、『法華文句』で思想的展開の飛躍を経て、晩年に著された鳩摩羅什訳『維摩詰所説経』（以下、『維摩経』と表記）関連の注釈書で思想的展開の最終形態として完成されたと見られている（新田[1981：13-25]）。その上で維摩経疏は、智顓自身が制作したと考えられ、その意味でも最晩年の維摩経疏に注目することは重要とされている（佐藤[1961：448]）。

維摩経疏は智顓の晩年、晋王広（後の隋の煬帝）に献上されたものである。晋王広への維摩経疏の献上は、以下の三回と考えられている（佐藤[1961：446]）。

- |     |                 |                       |
|-----|-----------------|-----------------------|
| 第一回 | 開皇十五年(595年)六、七月 | 『維摩経玄義』十卷             |
| 第二回 | 開皇十七年(597年)三、四月 | 『維摩経玄疏』六卷、『維摩経文疏』八卷   |
| 第三回 | 開皇十八年(598年)正月   | 『維摩経玄疏』六卷、『維摩経文疏』二十五卷 |

第二回献上本は、智顛自身の指示で廃棄されたとされる。『三観義』は第一回献上本の一部であり、『四教義』六巻、『四悉檀義』二巻も第一回献上本に含まれ、別行本としても扱われている<sup>1</sup>。現行の『維摩経玄疏』六巻は第三回献上本と考えられ、その巻第二には、『三観義』の内容に相当する「三観解釈」がある。

本研究では、まず智顛の維摩経疏である『三観義』と『維摩経玄疏』（以下、『玄疏』と表記）巻第二「三観解釈」の一心三観説の構成や内容の比較対照をする。次に六即と行位の対応関係、一心三観の十乗観法の展開を、智顛説灌頂記の『法華玄義』、『三観義』と同時代に作成された『四教義』の内容も含めて考察する。それらの考察を通して、一心三観説に関する改訂の目的について考察する。

## I. 『三観義』、「三観解釈」の全体の構成の比較

『三観義』と「三観解釈」の全体の構成は、表1の通りである。

表1 『三観義』、「三観解釈」全体の各項目の構成と字数

『三観義』 (X55, no. 909)	字数 (計20291)		「三観解釈」 (T38, no. 1777)	字数 (計10762)	
0 小序(669a06)	141	141	0 用三観釈維摩詰名(524c28)	149	149
1 先分別境智(669a13)	897	897	1 分別境智(525a11)	694	694
2 正積三観義(669c10)	77	77	(※0に再編)		
2.1 積三観名(669c14)	37	415	2 積三観名(525b22)	70	436
2.11 従仮入空観(669c15)	62		2.1 従仮入空観(525b26)	52	
2.12 従空入仮観(669c18)	70		2.2 従空入仮観(525b29)	57	
2.13 中道第一義観(670a04)	246		2.3 次積中道観(525c04)	257	
2.2 辨三観相(670a17)	21	21	3 辨三観相(525c19)	23	23
2.21 別相三観(670a18)	17	4821	3.1 明別相三観(525c24)	99	4436
2.211 総積(670a19)	145		(※3.1に再編)		
2.212 別積(670b03)	33		(※3.1に再編)		
2.2121 明従仮入空観相 (670b05)	2893		3.11 従仮入空観(525c26)	2619	

<sup>1</sup> 『法華文句記』巻第一、積序品、「『浄名』前玄總有十巻。因為晉王著『浄名疏』、別製『略玄』、乃離前玄分為三部。別立題目、謂四教六巻、四悉兩巻、三観兩巻。」(T34, no. 1719, p. 159, b13-16)を参照。

智顛著作における一心三観説の研究

2. 2122 明從空入仮観相 (672b09)	784		3. 12從空入仮観 (527c06)	797	
2. 2123 明中道第一義観相 (673a01)	949		3. 13中道第一義観 (528a24)	921	
2. 22 一心三観 (673c01)	66	1449	3. 2 明一心三観 (528c20)	74	536
2. 221 明所観之境 (673c04)	776		3. 21 明所観不思議之境 (528c24)	266	
2. 222 明能観之観 (674a19)	199		3. 22 明能観三観 (529a11)	73	
2. 223 明証成 (674b05)	408		3. 23 明証成 (529a15)	123	
2. 3 対智眼 (674c02)	423	862	4 対智眼 (529a22)	233	233
2. 31 対三智 (675a05)	77		該当箇所無し		
2. 32 対五眼 (675a08)	62		該当箇所無し		
2. 33 約教料簡 (675a12)	300		該当箇所無し		
2. 4 会乗義 (675b10)	47	9670	5 成諸乗義 (529b07)	48	3371
2. 41 正明別相三観開三乗 (675b12)	1742		5. 1 正明別相三観開三乗 (529b10)	1716	
2. 42 一心三智但は一仏乗 (676c05)	33		5. 2 一心三智但は一仏乗 (530b23)	241	
2. 421 明一心三智即大乘 (676c06)	699		(※5. 2に再編)		
該当箇所無し			5. 21 明理即大乘 (530c08)	20	
該当箇所無し			5. 22 明名字即大乘 (530c10)	15	
2. 422 明十法成大乘 (677a18)	90		5. 23 明観行即大乘 (530c12)	39	
2. 4221 善識不思議境 (677a23)	1234		5. 231 知不思議正因縁即是所 観境 (530c13)	174	
2. 4222 真正發心 (678a19)	765		5. 232 明真正發心 (530c23)	183	
2. 4223 止観修習 (678c10)	417		5. 233 明行菩薩道勤修止観 (531a05)	95	

2. 4224 破諸法遍 (679a07)	222		5. 234 明破諸法遍 (531a10)	81	
2. 4225 善知通塞 (679a19)	459		5. 235 須知通塞 (531a15)	39	
2. 4226 行三十七道品 (679b18)	1391		5. 236 明道品調適 (531a17)	113	
2. 4227 対治諸波羅蜜 (680b16)	593		5. 237 対治助修諸波羅蜜 (531a24)	59	
2. 4228 善識次位 (680c22)	182		5. 238 善識位次 (531a27)	108	
2. 4229 安忍成就 (681a08)	432		5. 239 安忍成就 (531b05)	99	
2. 42210 順道法愛不生 (681b06)	27		5. 2310 順道法愛不生 (531b11)	67	
2. 422101 明順道法愛不生 (681b07)	222		該当箇所無し		
該当箇所無し			5. 24 明相似即大乘 (531b14)	20	
該当箇所無し			5. 25 明分証真實即大乘 (531b16)	20	
該当箇所無し			5. 26 明究竟即大乘 (531b17)	234	
2. 422102 明成大乘相 (681b19)	23		該当箇所無し		
2. 4221021 明成乘人 (681b20)	161		該当箇所無し		
2. 4221022 辨乘相 (681c05)	586		該当箇所無し		
2. 4221023 明能運至 (682a11)	345		該当箇所無し		
2. 5 明撰法 (682b05)	1017	1017	(※6. 3に再編)		
2. 6 釈成淨名義 (683a08)	25	285	6 約断結釈淨名義 (531c02)	34	493
2. 61 断三諦惑証三諦理 (683a09)	40		6. 1 明不思議断結 (531c04)	256	
2. 62 明不思議三觀見不思議 三諦之理 (683a11)	112		(※6. 1に再編)		
2. 63 正釈淨名義 (683a16)	108		6. 2 成淨名義 (531c19)	103	
(※6. 3は2. 5に対応)			6. 3 撰法 (531c25)	100	

2.7 釈此経文(683a23)	32	634	該当箇所無し		391
2.71 釈経玄五義(683a24)	135		該当箇所無し		
2.72 正用三観通釈此経文(683b07)	467		7 通此経文(532a02)	391	

『三観義』の全体の構成は、「1 先分別境智」と「2 正解釈」に二分され、後者を細分した「2.2 辨三観相」の中に、「2.21 別相三観」と「2.22 一心三観」がある。

「三観解釈」の方は、全体を7項目に分別し、『三観義』と同様に、「3 辨三観相」の中に、「3.1 明別相三観」と「3.2 明一心三観」がある。表1を参照すると、『三観義』は20291字、「三観解釈」は10762字、「2.22 一心三観」は1449字、「3.2 明一心三観」は536字で、改訂後はおよそ半分短縮されている。

『三観義』と「三観解釈」の構成について、佐藤哲英氏は、『玄疏』の「三観解釈」は分量にして三観義の半分になっているので、引用文等で相当な省略がなされたことが知られると述べている（佐藤[1961:437]）。野本覚成氏は、『三観義』を「三観解釈」で約半分に縮小するために削除した部分は、現存二巻の『三観義』の僅なる部分であるとしている（野本[1979:110]）。これは両氏が一つ一つの両者の相違点について考察した上での意見ではなく、そのような断定に至るまでの論拠が欠けていると思われる。またこれに関しては、次章以降の『三観義』、「三観解釈」の一心三観の比較対照を通して、『三観義』を約半分に短縮したという単純な改訂ではないことを考察する。

## II. 『三観義』、「三観解釈」における智顓の一心三観

### 1. 「2.22 一心三観」／「3.2 明一心三観」の比較対照を通して

本節では『三観義』と「三観解釈」の一心三観の項目を比較し考察する。『三観義』から「三観解釈」への改訂においては、さまざまな改変がある。表1から分かる通り、一心三観の項目は大きな改変の一つである。表2以下、「2.22 一心三観」と「3.2 明一心三観」の内容の対照表を各科段ごとに示す。対照表は分かり易く段落ごとに一行空け、どちらかに該当箇所が無い場合は、段落の横に「該当箇所無し」と記す。

表2 『三観義』 2.22 一心三観／「三観解釈」 3.2 明一心三観の対照表

『三観義』 2.22 一心三観	「三観解釈」 3.2 明一心三観
2.22 一心三観	3.2 明一心三観
第二一心三観者、此観是深行利根菩薩之所修習。所以者何。不思議因縁之理甚深微妙。	第二辨一心三観者、正是圓教利根菩薩之所修習。所以者何。不思議心因縁之理、甚深微妙。
其観慧門難解、難入。今、明此観、亦為三意。一明所観之境、二明能観之観、三證成。	其観慧門、難解難入。今、明此一心三観、亦為三意。一明所観不思議之境、二明能観三観、三明證成。

表2の『三観義』の「一心三観」の部分参照すると、一心三観について、甚深の行いをする利根の菩薩が修行して身につけるものとし、その理由としては、不思議因縁の理は甚だ深く、微妙であり、その観慧の門は難解難入であるからとしている。『三観義』では、次に一心三観を、一に所観の境、二に能観の観、三に証成として、3つの部分に分けて説明をしている。

「三観解釈」では、『三観義』の「深行利根菩薩之所修習」の部分で、「圓教利根菩薩之所修習」として、「深行」を「圓教」に改変している。宇衛 [1984 : 64] が指摘するように、たった一語の相違ではあるが、化法の四教の枠組みの中に一心三観を配した点で、大きな意味を持っている。但し、その後の説明は『三観義』とほぼ同文であり、一心三観を、所観の境、能観の三観、証成の順に展開するのも『三観義』と同様である。

表3 『三観義』 2.221 明所観之境／「三観解釈」 3.21 明所観不思議之境の対照表

2.221 明所観之境	3.21 明所観不思議之境
一所観之境者、即是一念無明因縁具十法界、三諦之境也。	一明不思議之観境者、即是一念無明心因縁所生十法界、以為境也。
十法界者、一地獄法界。二畜生法界。三餓鬼法界。四脩羅法界。五人法界。六天法界。七聲聞法界。八緣覺法界。九菩薩法界。十佛法界。此即六是凡夫。四是聖人。所言法界者、法名自體。界以性別為義。此十種法體、因果不同。事性隔	該當箇所無し

<p>別、不相混濫、故言十法界。</p>	
<p>此十法界、皆是十二因縁之所成。故言因縁所生法也。十二因縁、並依無明無明之理體非異念。故言一念具足十法界也。一念十二因縁、出華嚴・大集・瓔珞經文。因縁三諦已如前辨。</p>	<p>該当箇所無し</p>
<p>問曰。九法界可是十二因縁所成。佛法界清淨、非生死法。云何亦説為十二因縁耶。</p>	<p>該当箇所無し</p>
<p>答曰。大品經云、若有能深觀十二因縁、即是坐道場。此經云、縁起是道場。無明、乃至、老死皆無盡故。又涅槃經云、十二因縁名為佛性。見佛性故住大涅槃。依此而推。十二因縁何得非佛法界也。</p>	<p>該当箇所無し</p>
<p>問曰。一念十二因縁具十法界。何得以為一心三觀之境。</p>	<p>該当箇所無し</p>
<p>答曰。①以一念十二因縁、即空・即假・即中三諦之理、不縱不横、不一不異、十法界法雖復無量、不礙一念無明之心。一念無明之心含十法界、無有迫妨。</p>	<p>該当箇所無し</p>
<p>問曰。一人具十法界。次第經無量劫。云何止在一念無明心内、不相妨礙耶。</p>	<p>問曰。一人具十法界。次第經無量劫。云何止在一念無明心内無妨闕也。</p>
<p>答曰。此經明不思議、須彌入芥子、不相妨礙。無情之物尚得如此。況心神微妙一念、具足一切三世諸心・諸法、何足致疑。</p>	<p>答曰。此經明不思議。須彌、入芥子、不相妨闕。無情之物尚得如此。心神微妙、一念具一切三世諸心・諸法。何足致疑。</p>
<p>問曰。諸大乘經皆明不思議。其意難見。云何了別。</p>	<p>該当箇所無し</p>

<p>答曰。佛法不思議道理、唯可仰信。豈可情求。若苟抱深迷、當以近譬。</p> <p>法華經安樂行品明、持經之人、若於夢中、但見妙事。所謂夢、見從初值佛發菩提心、乃至、成道轉法輪、經千萬億劫、度無量眾生。是則少時眠心、有無量夢事。無量夢事而不礙一念眠心。</p> <p>②<u>一念眠心能含無量劫事。無明一念具一切法不相妨礙、亦復如是。而眠時謂無量別。覺已、反觀、知止是一念眠心具無量心。今、時人、雖不夢裏見無量劫事、而亦倏忽見三數日事、見是無量夢事。只是一念眠心之內、而不相妨。世間現見如此。無明一念具一切法、不相妨礙。何所致疑。眠法覆心。即、譬無明覆中道佛性之真心。</u></p> <p>無量夢、即譬恒沙無知覆一切佛法妙事。夢事不實、而取著、憂喜、譬見思覆真空也。</p> <p>若不細尋夢譬、此不思議理疑終難決。故諸大乘經多說十喻。④<u>但諸師解譬、或時偏淺。唯見譬夢不實空邊、不見譬無明一念無量邊也。</u></p>	<p>該當箇所無し</p> <p>③<u>譬如眠法、覆心、一念之內、夢見一切諸心・諸事。若正眠夢之時、謂經無量劫。如法華經說、夢見初發心乃至成佛無量諸事。比其覺時、反觀祇是一念眠心也。心譬自性清淨心、眠法、覆心譬於無明。</u></p> <p>無量夢事、譬恒沙無知、覆一切恒沙佛法、夢事不實善惡憂喜、譬見思惑、覆真空也。</p> <p>若不細尋、夢譬不思議之疑、終無決理。故諸大乘經多說十喻。⑤<u>但諸法師不圓取譬意、止偏得虛偽空邊、不見譬無量無明・法性邊也。故三諦之境義不成也。</u></p>
--	---

表3の『三観義』の「2.221 明所観之境」を参照すると、所観の境とは、一念無明の因縁に十法界・三諦を具えていることを境（対象）とすると明確に述べている。そして、十法界について、十二因縁所成の十法界の説明がなされ、一念の十二因縁、即空・即仮・即中の円融三諦の理は、そのまま十法界の無量の法であり、一念の無明の心は十法界を含み、互いに妨げ合うことはないとしている。

この後、一念の無明の心と十法界の関係について問答が続くが、それらをまとめると、一念には無量の法がおさまっているが、三惑によって心が覆われているため、真実を見て取れないということになる。

『三観義』の一心三観の所観の境とは、一念無明の心に十二因縁によって成り立つ十法界・三諦の理も含む無量の法がおさまっていることになる。

一方、「三観解釈」の所観の境については、『三観義』には見られない「不思議」の語を用い、「所



観の不思議の境」としているが、内容的には『三観義』と同様、一念の無明の心の因縁所生の十法界のことである。『三観義』では十法界とともに三諦を境として挙げていたが、「三観解釈」では「三諦」の語が削除されている。

また『三観義』では、十法界についての記述があるが、「三観解釈」ではすべて削除されている。これについては、「三観解釈」の「1 分別境智」で、十二因縁に焦点を当てて、十法界が成立することが既に述べられているので、重複を避けたと考えられる。但し、その後の問答などは『三観義』とほぼ同文である。なお、表3下線部④、⑤は他の諸法師を批判しており、両者とも同趣旨である。ここで「三観解釈」では「故三諦之境義不成也」という一文を加えて、批判の意図を明確化している。

表4 『三観義』2.222 明能観之観／「三観解釈」3.22 明能観三観の対照表

2.222 明能観之観	3.22 明能観三観
<p>二明能観之観者、若観此一念無明之心、非空非假、一切諸法非空非假、亦不得非空非假、而能照此中道之空假。即是照一切法性、法界之空假也。①知假非假、即是入真。知空非空、即是入俗。照中道見二諦、即一心三観之相也。</p> <p>稱理之観、不得諸法、不知、不見、不斷癡愛、起諸明脱。亦不縛、不脱、無能、無所。真縁俱泯、離諸戲論。言語法滅、清浄心一、如水澄清、珠相自現。是為得一心三観之相。故大智論欲釋般若偈云、般若波羅蜜、實法不顛倒。念想観、已除、言語法亦滅。無量眾罪除、清浄心常一。如是尊妙人、則能見般若。</p>	<p>二明能観者、若観此一念無明之心、非空非假。一切諸法亦非空・假。而能知心空・假、即照一切法空・假。②是則一心三観圓照三諦之理。不斷癡愛、起諸明脱。若水澄清、珠相自現。此即観行即也。</p> <p>該当箇所無し</p>

表4の『三観義』の「2.222 明能観之観」を参照すると、一心三観の能観の観については、この一念無明の心を、非空非仮と観ずることにより、一切諸法も非空非仮であり、また非空非仮でない（実体として捉えられない）ことにより、中道の空仮を明らかにすることが説かれる。続けて、表4下線部①の仮は仮でないと知れば真に入り、空は空でないといれば俗に入り、そして中道を照らして二諦を見れば、それが一心三観の相であるとし、真諦・俗諦という二諦説の用語を使つての説明がなされている。理と合致した観は、あらゆるものにとらわれることがなく、清浄となる。これが一心三観を得る相としている。

一方「三観解釈」では、能観の三観を明らかにする部分については、一念無明の心を観ずれば、非空非仮を悟り、一切諸法も非空非仮であると悟り、心の空・仮を知れば、一切法の空・仮を照らすという趣旨は『三観義』と変わらない。

その後の表4下線部②の部分は、『三観義』では既述の表4下線部①のように真・俗の二諦と中道によって説明しているが、「三観解釈」では、「是則一心三観圓照三諦之理」とし、「二諦」に替えて「三諦の理」の語を用いている。

続く一心三観によって諸法にとらわれないことについての説明は、『三観義』に比べるとかなり簡略であるが、「三観解釈」ではこのことを「此即観行即也」とし、観行即に一心三観を配することを明示する内容を新たに加えている。

表5 『三観義』2.223 明証成／「三観解釈」3.23 明証成の対照表

2.223 明証成	3.23 明証成
<p>三明證成者、若證一心三観、即是一心三智・五眼也。</p>	<p>三明證成者、若證一心三観、即是一心三智、五眼也。</p>
<p>如覺時。知夢不實、無量夢事皆依眠心。三義宛然皆不可得。朗然大悟無所依稀。即是初心一念相應慧、是悟佛菩提智也。</p>	<p>該当箇所無し</p>
<p><u>此經云、一念知一切法。是坐道場。成就一切智。</u> <u>①故大品經云、菩薩以一切種智知一切法也。</u></p>	<p>下線部は T38, no. 1777, p. 529, a18-19 に同文有り、下線部①は該当箇所無し</p>
<p>法華經云、為一大事因縁、開佛知見、使得清淨也。涅槃經云、發心・畢竟二不別。如是二心、前心難。華嚴經云、破一微塵、出三千大千經卷也。即此經明、入不二法門、不斷癡愛住不思議解脫、不起滅定現十法界身、度一切眾生也。</p>	<p>該当箇所無し</p>
<p>此真観因縁中道、不生不生、證無作四實諦。是真一切種智、是真佛眼。見於佛性、住大涅槃。</p>	<p>該当箇所無し</p>

<p>問曰。何經論出此一心三觀。</p>	<p>該當箇所無し</p>
<p>答曰。上引諸經並證斯義。且釋具有明文。論自解。三智一心中得。欲令易解、分屬三人。</p>	<p>該當箇所無し</p>
<p>問曰。<u>如佛、說三種智、其實一心中得、云何、言欲以道慧具足道種慧、乃至、一切種智、當學般若波羅蜜。</u></p>	<p>下線部は T38, no. 1777, p. 529, a21-22 に同文有り、下線部以外は該當箇所無し</p>
<p>答曰。<u>②是三種智、其實一心中得、今欲分別為人說、令易解故、作此次第耳。</u>復次、三智雖一心、而用智有異。譬如、三相雖在一心、而相不同。今、論謂三相、譬一心三諦之理。謂相不同、一心三智照此三諦、亦不濫也。若非求一心三觀、善巧修習相應、豈得一心證三智也。</p>	<p>下線部は T38, no. 1777, p. 529, a21-22 に同文有り、下線部以外は該當箇所無し</p>
<p>下線部は X55, no. 909, p. 674, b8-9 に同文有り、下線部以外は該當箇所無し</p>	<p>若得六根清淨、名相似證。即十信位也。若發真無漏、名分證真實即。即是初住也。<u>此經云、一念知一切法、即是坐道場、成就一切智故。</u></p>
<p>下線部は X55, no. 909, p. 682, a24-b2 に同文有り</p>	<p><u>③大品經云、有菩薩、從初發心即坐道場。當知、是菩薩為如佛也。</u></p>
<p>下線部は X55, no. 909, p. 674, b20-21 に同文有り、下線部以外は該當箇所無し</p>	<p>智度論云、<u>④三智、其實、一心中得。佛欲分別為人說、令易解故、故次第說耳。</u></p>

表5の『三觀義』の「2.223 明証成」を参照すると、証成を明らかにするとして、一心三觀を証する（体得する）とは、一心の三智・五眼を得ることであるとし、初心の菩薩が修する一念に相應する慧であり、仏の菩提を悟る智であるとしている。ここで、五眼についての直接的な説明はないが、五眼については、「2.3 対智眼」の所で、詳しく論じている。

「三觀解釈」の「3.23 明証成」の部分では、『三觀義』と同様に、一心三觀を体得するならば、それは即ち一心三智と五眼であると述べられている。しかし、それ以後の文は『三觀義』とは大きく異なる。「三觀解釈」はこの後、以下の文が続く。

若得六根清淨、名相似証。即十信位也。若發真無漏、名分証真實即。即是初住也。此經云、一念知一切法、即是坐道場、成就一切智故。(T38, no. 1777, p. 529, a16-19)

もし六根清淨を得れば、相似の証と名づける。取りも直さず十信の位である。もし真無漏を生ずれば、分証真實即と名づける。取りも直さず初住である。この經(=維摩經)には、「一念に一切法を知るとは、覺りの場に坐して、一切智を成就するからにはかならない」と言う。

既述のように、能觀の箇所では觀行即に一心三觀を配していたが、ここでは、さらにその後の六根清淨および真無漏の獲得によって、六根清淨は相似証、真無漏は分証真實即に入ることが述べられる。更に仏果を得ることを目的とする修行者の五十二の修行階位(五十二位)に配して、相似証を十信、分証即を初住に配している。

一方『三觀義』は既述の通り、一心三觀を証する(体得する)とは、初心の菩薩が修する一念に相應する慧であり、仏の菩提を悟る智であるとし、表5下線部①の『大品經(大品般若)』の部分がある。「三觀解釈」では、同じ『大品經(大品般若)』でも表5下線部③の文に入れ替えている。

大品經云、有菩薩、從初發心即坐道場。當知、是菩薩為如佛也。(T38, no. 1777, p. 529, a19-20)

『大品般若經』には、「初發心からただちに覺りの場に坐する菩薩がいる」と言う。この菩薩を「仏のようである」とするのである。

一心三觀で真無漏を生ずれば、分証真實即、初住(初發心住)としたのに合わせて、「初發心」の語を含む經文に入れ替えたものと考えられる。

『三觀義』では『大品經(大品般若)』の引用の後、『法華經』・『涅槃經』・『華嚴經』を引用して文証としているが、「三觀解釈」では削除されている。『三觀義』ではその後続く問答によって一心三觀と一心三智の関係について論じているが、「三觀解釈」では表5下線部④の『大智度論』の引用<sup>2</sup>のみで、簡略化されている。なお、五眼については、両者ともに次項目の「2.3 対智眼」/「4 対智眼」に譲っている。

『三觀義』の「2.223 明証成」では、一心三觀を証する(体得する)ことを説明しているのに対し、「三觀解釈」では既述の通り、「3.22 明能觀三觀」で觀行即に一心三觀を配したことに続き、「3.23 明証成」でも、一心三觀の修行で得られる結果を六即に対応させた行位を明示している。

<sup>2</sup> 『大智度論』卷第二十七、序品第一、「問曰、一心中得一切智、一切種智、斷一切煩惱習。今云何言以一切智具足得一切種智、以一切種智斷煩惱習。答曰、實一切一時得。此中為令人信般若波羅蜜故、次第差品說。欲令衆生得清淨心、故如是說」(T25, no. 1509, p. 260, b17-22)を参照。

## 2. 智顓における一心三観の展開過程——六即と行位の対応関係を通して

既に前節において、『三観義』から「三観解釈」への改訂過程における一心三観の箇所の変化について概略を示した。『三観義』から「三観解釈」への改訂作業を経て、「三観解釈」では、一心三観の修行による行位と果位の対応関係を明確に記述し、また六即と行位の関係を明らかにした。本節ではこのことを通し、智顓がどのようにそれらの改訂を進めたのかについて考察する。

### 『法華玄義』

若欲免貧窮、當勤三観。欲免上慢、當聞六即。世間相常住、理即也。於諸過去佛、若有聞一句、名字即也。深信隨喜、観行即也。六根清淨、相似即也。安住實智中、分證即也。唯佛與佛、究盡實相、究竟即也。(T33, no. 1716, p. 686, a22-27)

もし貧乏から解放されようとするならば、[空観・仮観・中観の]三観に励むべきである。増上慢から解放されようとするならば、[理即・名字即・観行即・相似即・分証即(分真即)・究竟即の]六即を聞くべきである。「世間の様相は常住である」とは、理即である。「多くの過去仏のもとで、もし一句を聞くことがあれば」とは、名字即である。「深く信じ随喜する」とは、観行即である。「六根清淨」とは、相似即である。「真実の智慧に安住する」とは、分証即である。「ただ仏と仏だけが実相を究め尽くす」とは、究竟即である(菅野[2018:60])。

『法華玄義』の上記引用では、七番共解の第六の観心の所で、貧窮の人や増上慢の人にならないためには、三観の修行に励み、六即を聞くべきであると、理即から究竟即までの意味を説明している部分である。この中で、深く信じ随喜することは観行即であるとしている。またそれに続いて、六根清淨は相似即、実智の中に安住する(初住以降)のは分証真実即としている。

### 『四教義』

八善識次位者、涅槃即生死、菩提即煩惱。此是理即。若知生死即涅槃、煩惱即菩提、是為名字即。因此観行、分明成五品弟子、即是観行即。得六根清淨、名相似即。成四十一地、即是分證真実即。證妙覺果、即是究竟即。若能善解此之次位、即不起大乘増上慢、大乘旃陀羅之過罪也。(T46, no. 1929, p. 762, a28-b5)

第八に階位を善く認識するとは、涅槃は取りも直さず生死であり、菩提は取りも直さず煩惱である。これは理即のことである。もし生死は取りも直さず涅槃であり、煩惱は取りも直さず菩提であることを知れば、名字即となる。この観行によって、分明に五品弟子を成すと、観行即である。六根清淨を得ると、相似即と名づける。四十一地を成すと、取りも直さず分証真実即である。妙覺果を体得すれば、究竟即である。もし善くこの階位を理解すれば、大乘の増上慢、大乘の旃

陀羅の過罪を起こさないのである。

上記の『四教義』の引用を参照すると、六即の階位を善く認識するとして、観行即は分明に五品弟子を成すと述べられている。その後の相似即、分証真実即の内容も「三観解釈」と対応している。四十一地とは初住から等覺に到達するまでの修行過程と果位をまとめて数えたものである。

さきほどの『法華玄義』の引用で、深く信じ随喜することが観行即であるとの意味は、ここでの五品弟子を成すことに見られるように、五品弟子位（随喜品・読誦品・説法品・兼行六度品・正行六度品）の「随喜品」及びそれ以降を指している。

また、七番共解の第七会異の部分で、四悉檀の解釈の第七用不用で説かれる内容は以下の通りである。

#### 『法華玄義』

圓教五品弟子、未能得用、六根清淨相似得用、初住分真得用也。(T33, no. 1716, p. 690, a10-12)

圓教の五品弟子〔位〕は、未だに〔四悉檀の〕作用を得ることはできず、六根清淨〔位〕で近似的に作用を得、初住で部分的に作用を得るのである。

圓教の五品弟子では、まだ四悉檀の作用を得ることができない。そして六根清淨の位では近似的（相似）に作用を得て、次の初住の位では部分的（分真）に作用を得ることができるとしている。

#### 『三観義』

三明能運至者、行者即是不思議因縁眾生。理即是大乘也。因理即故有名字。名字即即是假名發心。欲乘大乘名觀行即。正乘大乘欲出三界、乃至、始出三界名相似即。仁王經云、十善菩薩發大心、長別三界苦輪海。乘是寶乘遊於四方者、開示悟入十住・十行・十迴向・十地是為四方。皆名分証真實即也。直至道場名究竟即也。(X55, no. 909, p. 682, a11-17)

第三に運び至ることを明らかにするとは、行者は不思議因縁の衆生である。理即は大乘である。理即に因るので名字がある。名字即は假名發心である。大乘に乘じようとするを觀行即と名づける。正しく大乘に乘じて三界を出ようということから、はじめて三界を出ることに至るまでを相似即と名づける。『仁王經』には、「十善の菩薩は大心を發し、永遠に三界の苦輪海から離れる」とある。この宝乘に乘じて四方に遊ぶとは、開示悟入の十住、十行、十迴向、十地を四方とする。これらはすべて分証真実即と名づける。直ちに道場に至ることを究竟即と名づける。

『三観義』にも、「2. 422102 明成大乘相」(大乘の相を成ずることを明らかにする)として、「2. 4221023 明能運至」において六即に対応させて大乘の相が説かれている。既述の『法華玄義』、『四教義』、

前節の「三観解釈」に見られるような、観行即は五品弟子位、相似即（相似証）は六根清浄（十信位）、分証（分真）即は初住の位（真無漏）であると配する明確な記述は見当たらない。しかし、六即に対応する記述の趣旨はほぼ一致している<sup>3</sup>。

また「2.4221021 明成乘人」に、

若人成就如前十法、則一心三観自然流入薩婆若海。（X55, no. 909, p. 681, b20-21）

若し人が、前に説いた十[乗観]法を完成したならば、一心三観によって自然に薩婆若海に流入するのである。

また、「2.4221023 明能運至」には、

求不思議解脱者、不可出三観法門也。（X55, no. 909, p. 682, b3-4）

不思議解脱を求めようとするならば、三観の法門から出ることにはできないのである。

とある。

「三観解釈」には前節で既述の通り、「3.22 明能観三観」では観行即に一心三観を配し、「3.23 明証成」で六根清浄は相似証、真無漏は分証真実即となることが述べられており、五十二位に配して、相似証を十信、分真即を初住に配していた。また、

四明相似即大乘者、即是得六根清浄。如法華經説。（T38, no. 1777, p. 531, b14-15）

第四に相似即大乘とは、取りも直さず六根清浄を得ることに他ならない。『法華経』[「法師功德品」]に説かれるとおりである。

五分證眞實即大乘者、即是初發心住、乃至、等覺也。（T38, no. 1777, p. 531, b16-17）

第五に分証眞實即大乘とは、即ち初發心住から等覺までである。

六明究竟即大乘者、即是妙覺地。（T38, no. 1777, p. 531, b17）

第六に究竟即大乘を明らかにするとは、取りも直さず妙覺地のことに他ならない。

若住妙覺、即是乘是寶乘、直至道場。名到薩婆若中住。（T38, no. 1777, p. 531, b28-29）

<sup>3</sup> 『三観義』、「三観解釈」両者とも「2.41 正明別相三観開三乗」／「5.1 正明別相三観開三乗」で、別相三観の十乗観法後の料簡にも六即乗の記述が見られ、行位との対応関係は『法華玄義』、『四教義』、『玄疏』「三観解釈」「3.2 明一心三観」と同様の明示はないが、趣旨は同じである。

若し妙覚[の位]に住すれば、取りも直さず[『法華経』の]「是の宝乗に乗って、直ちに道場に至る」に他ならない。[『大品般若経』には、]「薩婆若の中に住す」と名づける。

略明一心三観成一佛乘竟。(T38, no. 1777, p. 531, c1-2)

かいつまんで一心三観によって一仏乗を成ずることを明かし終わる。

との表現もあり、『三観義』、「三観解釈」共に、一心三観によって薩婆若海、不思議解脱、あるいは究竟即大乘に至るとしており、妙覚の位に達するという意味であると考えられる。

智顛は『小止観』で「獲得六根清浄、入佛境界」(T46, no. 1915, p. 472, c27)とし、この引用の直前には、中道により、仏眼と一切種智を得た後で、そこから先は如来の修行を行ずる段階となり、如来の莊嚴により自らを莊嚴できれば、六根清浄を獲得し、仏の境界に入ると示されている。その後、「於十方國土、究竟一切佛事、具足真應二身、則是初發心菩薩也」(T46, no. 1915, p. 473, a6-8)とある。この引用の直前には、六根清浄を得た後も、引き続き如来の位に向かって修行をし、無上正覺、轉正法輪を経て、般涅槃に入るとし、ここまでくれば十方の國土において一切の仏事を究めるとし、真應の二身が具われば、初發心住の菩薩であるとしている。

ここまでは既述の行位の対応関係と同じだが、後続に「次、明後心證果之相、後心所證境界、則不可知、今推教所明、終不離止観二法」(T46, no. 1915, p. 473, a18-20)とあることから、初發心住以降の相や境界を体得することを明らかにするのは知ることができなとしながらも、止観の修行であることは間違いなしとしている。既述の新田氏等の研究によれば、この『小止観』作成の時代は、まだ智顛の思想(三観説)の飛躍的な展開を遂げる前の段階であった。従ってその後、三大部講説時代を経て智顛の晩年に至り、一心三観によって観行即以降、究竟即まで続いていく修行へと展開したと解することが、智顛の思想の発展段階からも適切だと思われる。

但し「三観解釈」では、相似即大乘、分証真實即大乘、究竟即大乘に関して、行位が上であるにはあまりにも説明が短いことや、『大品般若経』の引用<sup>4</sup>を用いて、初發心住の菩薩の位のことを、仏のようであると知るべきであると述べている通り、歴劫修行という中において、初發心住の位までを現世で修行して到達できることをターゲットとして考え、それ以上の位について議論の対象にしていなかったとも考えられる。

以上、六即と行位の対応関係を明示している智顛の著作からの引用を列挙して参照してみた。『法華玄義』は『三観義』以前に説かれているが、六即それぞれに対応する行位を明確に説いており、『四教義』も『三観義』と同時代に説かれたものだが、『法華玄義』同様に、六即それぞれに対応する行位を明確に説いている。従って、『法華玄義』に関しては灌頂の修治整理による成立であることを考

<sup>4</sup> 『摩訶般若波羅蜜經』卷第一、習應品第三、「佛告舍利弗、菩薩摩訶薩從初發意行六波羅蜜、乃至坐道場、於其中間常為諸聲聞、辟支佛作福田」(T08, no. 223, p. 222, b19-22)を参照。



慮しなければならないが、智顛の六即に対応する行位の考え方には一貫性があると考えてよい。しかし三大部や維摩経疏の中に、「三観解釈」の「3.22 明能観三観」のように、円教位の観行即に一心三観を配すると明示した上で、一心三観を体得することに配して、観行即以降の六即と行位の関係を明示している記述は『玄疏』以外には見当たらない。

『法華玄義』については、灌頂が再三再四修治し、整理し、維摩経疏の第三回献上、智顛の入寂の数か月前に届けられたとされる（佐藤 [1961 : 427]）。従って、智顛が晋王広への第三回献上本である『玄疏』作成時において、灌頂の提出した草稿本を大いに活用し（山口 [2017 : 46-47]）、「三観解釈」の記述では「3.22 明能観三観」において既述の通り、円教位の観行即に一心三観を配することを明示し、続く「3.23 明証成」において六即と行位の対応関係を明確にしたとも考えられる。

その可能性を探るため、次節では『三観義』から「三観解釈」への改訂過程で大きな変更（削除）が行われた「2.4 会乗義」／「5 成諸乗義」の十乗観法の部分を考察する。

### 3. 一心三観と十乗観法について

#### ——『法華玄義』と「三観解釈」の十乗観法の比較を通して

『三観義』と「三観解釈」の十乗観法の比較は、表1の対照表を見ても明らかな通り、『三観義』は「2.422 明十法成大乘」に説かれる十乗観法が中心であるのに対し、「三観解釈」では「此須約六即明圓教一佛乘。即是六種大乘義也。」（T38, no. 1777, p. 530, c7-8）とし、六即を用いて円教の一仏乗を明らかにし、これは六種類の大乗の義であると説明し、且つ「5.23 観行即大乘」の中に十乗観法を配する形になっている。その内容に関しては、先行研究の山口氏がすでに指摘している<sup>5</sup>。

本節では「三観解釈」の十乗観法は『四教義』の円教位の十乗観法とほぼ同文が用いられていると指摘する先行研究（宇衛 [1984 : 65]）、観行即大乘（観行即、五品弟子位）に十乗観法を配するのは他の著述にはなく、『玄疏』のみに見られる論述であるとする先行研究（野本 [1979 : 111]）等を参照する。作成年代から考えれば、灌頂が草稿本を智顛に提出した『法華玄義』の円教の門の十乗観法は、『三観義』『四教義』の十乗観法の内容を参照して修治整理された可能性がある。逆に智顛の「三観解釈」の十乗観法は、『三観義』、『四教義』に加え、灌頂の提出した『法華玄義』の草稿本の十乗観法を参照した可能性もあり、両者について考察をする。

以下、『法華玄義』の円教の門において説かれる十乗観法の内容と、「三観解釈」の十乗観法の対

<sup>5</sup> 「これらの相違を要約すると、『三観義』は十法成大乘の観法が中心であるのに対し、「三観解釈」は六即を基調とし観行即の中に十法成大乘を包括するという構成の変更があったことが明らかとなる。また、十法成大乘の第一である分別不思議境では、『三観義』が不思議十二因縁を境として、その十二因縁を三道や三因仏性にかけ解釈を展開すると同時に、『維摩経』も用語はなくとも仏性を説く經典であることが問答形式で強調される（卍続蔵九九冊九〇頁下～九二頁上）。それに対し、「三観解釈」はこれらの内容を欠いており、代わりに「涅槃即生死」、「菩提即煩惱」、「生死即涅槃」、「煩惱即菩提」を無作四諦の苦・集・滅・道に配当し、これらが一実諦であることを強調しているため（大正蔵三八卷五三〇頁下、『三観義』とはかなり内容を異にしている）（山口 [2010 : 600]）。

照表を示した。両者の共通点として、菩提即煩惱、煩惱即菩提、涅槃即生死、生死即涅槃の四種の即  
に下線を引き、考察する箇所として①、②の下線を引く。該当箇所が無い場合は、該当箇所無しと表  
記する。

表6 『法華玄義』の十乗観法と「三観解釈」の十乗観法の比較

『法華玄義』卷第九の十乗観法 (T33, no. 1716, p. 789, c10-p. 790, b18)	「三観解釈」の十乗観法 (T38, no. 1777, p. 530, c13-p. 531, b14)
2 明円観	5.23 明観行即大乘
二明入實観者、上已知四圓門。今、依有門修観。 観則為十、(云云)。對前十二思議之門、名不 思議境。	該当箇所無し
2.1 不思議境	5.231 知不思議正因縁即是所観境
不思議境、即是一實四諦。謂、生死苦諦、不可 思議、即空・即假・即中。即空故方便淨、即假 故圓淨、即中故性淨。三淨一心中得、名大涅槃。 『淨名』曰、「一切眾生、即大涅槃。」故名不 可思議四諦也。不可復滅。此即生死之苦諦、是 無作之滅。亦是集・道也。煩惱集諦不可思議、 即空・即假・即中。②即空故名一切智、即假故 名道種智、即中故一切種智。三智一心中得、名 大般若。『淨名』曰、「一切眾生、即菩提相。 不可復得。」此即煩惱之集、而是無作道諦。亦 是苦滅。故名不思議一實四諦也。亦是真善妙色。 何者、生死即空故名真、生死即假故名善、生死 即中故名妙。此名有門不可思議境也。	一知不思議正因縁即是所観境。①如前明一念眠 心具一切夢法、譬一念無明具一切法三諦之理不 縱不横、即其義也。此須的取維摩、訶彌勒、言 一切眾生即大涅槃即菩提相、明此不思議因縁 也。所以者何。中道第一義諦非因縁、是無作四 諦之因縁也。若言涅槃即生死、一實諦即是苦因 縁。若言生死即涅槃、一實諦即是滅因縁。若言 菩提即煩惱、一實諦即是集因縁。若言煩惱即菩 提、一實諦即是道因縁也。是為知不思議世間・ 出世間正因縁也。
2.2 發真正心	5.232 明真正發心
二發真正心者、一切眾生、即大涅槃。云何顛倒、 以樂為苦。即起大悲、興兩誓願、令未度者度、 令未斷者斷。一切煩惱、即是菩提。云何愚闇、 以道為非道。即起大慈、興兩誓願、令未知者知、 未得者得。無緣慈悲、清淨誓願。慈善根力、任	二次明真正發心者、即是無緣慈悲、無作四弘誓 願也。若無緣大慈觀生死即涅槃、煩惱即菩提、 與眾生此滅道之樂、名無緣大慈也。觀涅槃即生 死、菩提即煩惱、欲拔眾生此虛妄之苦、名無緣 大悲也。無作四弘誓願者、知涅槃即生死、未度

<p>運吸取一切眾生也。</p>	<p>苦諦、令度苦諦也。知菩提即煩惱、未解集諦、令解集諦也。知煩惱即菩提、未安道諦、令安道諦也。知生死即涅槃、未得涅槃、令得涅槃也。菩薩如是慈悲・誓願・無緣・無念而覆一切眾生、猶如大雲不加功用、如磁石吸鐵。是名真正菩提心也。</p>
<p>2.3 安心</p>	<p>5.233 明行菩薩道勤修止觀</p>
<p>三安心者、既體解成就、發心具足、豈可臨池觀魚、不肯結網、裹糧束脚、安坐不行。修行之要、不出定慧。譬如陰陽調適、萬物秀實。雨早不節、焦爛豈生。若兩輪均平是乘能運、二翼具足堪任飛升。體生死即涅槃名為定、達煩惱即菩提名為慧。於一心中巧修定慧、具足一切行也。</p>	<p>三明行菩薩道勤修止觀者、若知生死即涅槃、即是善修止也。若知煩惱即菩提、即是善修觀也。如陰陽調適萬物長成。若巧修止觀、即能一心具萬行也。問曰。以何為集。答曰。依此經、及涅槃經、無明、愛一切煩惱為集諦。業屬於苦。於今對義為便也。</p>
<p>2.4 破法遍</p>	<p>5.234 明破諸法遍</p>
<p>四破法遍者、以此妙慧、如金剛斧所擬皆碎、如無翳日所臨皆朗。若生死即涅槃者、分段・變易苦諦皆破、若煩惱即菩提者、四住・五住集諦皆破。雖復能破、亦不有所破。何者、生死即涅槃故、無所破也。</p>	<p>四明破諸法遍者、若知生死即涅槃、即破分段・變易二種生死皆遍。若知煩惱即菩提、則破一切界內・界外煩惱遍也。譬如轉輪聖王能破一切強敵、亦不有所破。般若波羅蜜亦復如是、能破一切法、亦不有所破。</p>
<p>2.5 識通塞</p>	<p>5.235 須知通塞</p>
<p>五識通塞者、如主兵寶取捨得宜、強者綏之、弱者撫之。知生死過患名為塞、即涅槃名為通。煩惱惱亂名為塞、即是菩提名為通。始從外道四見、乃至圓教四門、皆識通塞。節節執著即是塞、節節亡妙名為通。若不識諸法夷嶮、非但行法不前、亦亡去重寶也。</p>	<p>五善知通塞者、知生死即涅槃、煩惱即菩提、則一切皆通。知涅槃即生死、菩提即煩惱、則一切皆塞也。</p>
<p>2.6 善識道品</p>	<p>5.236 明道品調適</p>
<p>六善識道品者、觀生死即涅槃、十界生死色陰皆非淨、非不淨、乃至、識陰非常、非不常。能破八顛倒、即法性四念處。念處中、具道品、三解脫、及一切法。又、知涅槃即生死顯四枯樹、知生死即涅槃顯四榮樹。知生死涅槃不二、即一實</p>	<p>六善修道品者、觀十法界五陰生死即是法性五陰、法性五陰即是性淨涅槃、即是四念處破八倒。知涅槃即生死、顯四枯也。知生死即涅槃、顯四榮也。知一實諦、是見虛空佛性、住大涅槃也。因此四念處、修正勤・如意足・根・力・覺・道、</p>

<p>諦。非枯非榮、住大涅槃也。</p>	<p>即是道品。善知識由是成正覺。亦是莊嚴雙樹。是則煩惱即菩提。</p>
<p>2.7 善修對治</p>	<p>5.237 對治助修諸波羅蜜</p>
<p>七善修對治者、若正道多障、應須助道。觀生死即涅槃、治報障也。觀煩惱即菩提、治業障・煩惱障也。</p>	<p>七對治助修諸波羅蜜者、知菩提即是重惡煩惱。是以知生死即涅槃、對治諸波羅蜜。諸度法等侶、助煩惱即菩提開三解脫門。對治若成、煩惱即菩提也。</p>
<p>2.8 善知次位</p>	<p>5.238 善識位次</p>
<p>八善知次位者、生死之法、本即涅槃、理涅槃也。解知生死即涅槃、名字涅槃也。勤觀生死即涅槃、觀行涅槃也。善根功德生、即相似涅槃也。真實慧起、即分真涅槃也。盡生死底、即究竟涅槃也。觀煩惱即菩提、亦如是。</p>	<p>八善識位次者、涅槃即生死、菩提即煩惱。此是理即。若知生死即涅槃、煩惱即菩提、是為名字即。因此觀行、分明成五品弟子、即是觀行即。得六根清淨、名相似即。成四十一地、即是分證真實即。證妙覺果、即是究竟即。若能善解此之次位、即不起大乘增上慢、大乘旃陀羅之過罪也。</p>
<p>2.9 善安忍</p>	<p>5.239 安忍成就</p>
<p>九善安忍者、能安內外強軟遮障、不壞觀心。若觀生死即涅槃、不為陰入境・病患・業・魔・禪・二乘・菩薩等境所動壞也。若觀煩惱即菩提、不為諸見、增上慢境所動壞也。</p>	<p>九安忍成就者、若知生死即涅槃、即不為陰界入境・病患境・業相境・魔事境・禪門境・二乘境・菩薩境之所壞也。若知煩惱即菩提、即不為煩惱境・諸見境・增上慢境之所壞。能忍此無作苦集、不為所壞者、此如大智論、說能忍成道事、不動亦不退、是心名薩埵也。</p>
<p>2.10 無法愛</p>	<p>5.2310 順道法愛不生</p>
<p>十無法愛者、既過障難、道根成立、諸功德生、觀生死即涅槃故、諸禪三昧功德生。觀煩惱即菩提故、諸陀羅尼、無畏、不共、諸般若生。觀生死涅槃不二故、法身・實相生。相似功德、順理而生、喜起順道法愛。生名愛法、不上不退名為頂墮。此愛若起、即當疾滅。愛若滅已、破無明、開佛知見、證實相體。觀生死即涅槃故、證得解脫。煩惱即菩提故、證得般若。此二不二、證得法身。一身無量身、無上寶聚、如意圓珠、眾法具足。是名有門入實、證得經體。餘三門亦如是。</p>	<p>十順道法愛不生者、觀生死即涅槃、生一切諸禪定、三昧等功德。觀煩惱即菩提、生諸陀羅尼門・四無所畏・十八不共法・四無闕智・一切種智。於順道法不愛不著、是為觀行乘。</p>

「2.1 不思議境」／「5.231 知不思議正因縁即是所観境」では、『法華玄義』は円教の門における実相に入る観察を明らかにするとし、前の十二思議の門（蔵通別の四門のこと）に対して、これを不思議境と称するとしている。一的不思議境について、『法華玄義』では一実四諦とすること、「三観解釈」では、不思議の正因縁は所観の境であることを知るとしている。

「2.1 不思議境」では一実四諦について、表6下線部②の三智（一切智、道種智、一切種智）は即空即仮即中であるから、一心の中に得るとし、表5下線部②の『三観義』「2.22 明一心三観」「2.223 明証成」で『大智度論』を用いて、一心三観と一心三智の関係を説明した内容と同趣旨の内容が見られる。これは表5下線部④の「三観解釈」「3.2 明一心三観」「3.23 明証成」でも、同じ『大智度論』の部分を用いた同趣旨の説明が見られる。後続には、煩惱の集諦は無作の道諦であり、また苦諦、滅諦であるとし、故に不思議一実四諦と名づけるとし、これを有門不可思議境としている。

「5.231 知不思議正因縁即是所観境」の表6下線部①は、表3下線部①、②の『三観義』「2.22 明一心三観」「2.221 明所観之境」で『法華経』「安樂行品第十四」を用いて、一念の内に、一切の諸心・諸事（初発心から成仏までの無量の諸事）を見るようであるとする内容と同趣旨の内容が見られる。これは表3下線部③の「三観解釈」「3.2 明一心三観」「3.21 明所観不思議之境」でも、同じ『法華経』「安樂行品第十四」の部分を用いた同趣旨の説明が見られる。後続には、涅槃即生死が一実諦、苦の因縁とし、生死即涅槃が一実諦、滅の因縁とし、菩提即煩惱を一実諦、集の因縁とし、煩惱即菩提を一実諦、道の因縁としている。これを「知不思議正因縁即是所観境」として説いている。

『四教義』には「2.1 不思議境」／「5.231 知不思議正因縁即是所観境」に対応する部分である「一善識思議不思議因縁者」<sup>6</sup>に、「2.1 不思議境」で説いた不思議一実四諦ではなく、不思議無作四実諦として、既述の表3下線部①、②の『三観義』「2.22 明一心三観」「2.221 明所観之境」と同趣旨の内容が見られる。しかし「三観解釈」「5.231 知不思議正因縁即是所観境」にあるように、無作四諦の因縁を、菩提即煩惱、煩惱即菩提、涅槃即生死、生死即涅槃の四種の即に当てはめ、説明するという手法は用いられていない。従って智顓は、「三観解釈」における円教位の十乗観法の説明をすべて四種の即を用いる一貫した形式に進展させたとも考えられる。また『四教義』の「明因修十法入十信心（十法を修することによって、十信心に入ることを明らかにする）」（T46, no. 1929, p. 762, b16-17）では、これらの十乗観法を巧みに修行し、十信心の位を目指す段階を観行即と名づけるとしている<sup>7</sup>。

<sup>6</sup> 『四教義』卷第十一、「一善識思議不思議因縁者、思議因縁者、如上三教所明。不思議因縁者、即是今所説、不思議無作四實諦。如前三観中明。譬如一念眠心具一切法、不縱不横即是不思議因縁、無作四實諦也。如此的取維摩大士呵彌勒云、一切眾生即大涅槃、即菩提相。明此不思議因縁、餘九法亦如是。義意玄隱、今次第明、尋者可善思之。」（T46, no. 1929, p. 761, c15-23）を参照。

<sup>7</sup> 『四教義』卷第十一、「三明因修十法入十信心者、解正因縁不思議無作四諦、即修初信心、信平等法界佛法僧三寶也。二真正發菩提心。慈悲誓願憐愍一切。即是修念心也。三勤修止觀、成一切萬行。即是修進進心也。四用觀破諸法遍、即是巧修慧心。五止心澄靜、一切得失通塞之相自現。即是修定心也。六道品次第增長、善根不退不沒。即是修不退心。七迴事中諸度助、開三解脫門。即是修迴向心。八善知次位、所防增上慢、離施陀羅業、即是修護法心。九安忍成就、内外惡法皆不得生。即是修戒心。十順道法愛不生、若願求勝果、即不愛著所得淺近法門。故名願心。是以菩薩知生死即涅槃、知煩惱即菩提、故能巧修此十法、即是修十信心名觀行即。」（T46, no. 1929, p. 762, b16-c2）を参照。

以上の考察から、作成年代をふまえて整理すると、

- 1、灌頂は『三観義』、『四教義』を参照し、『法華玄義』の草稿本を作成し、智顛に提出した可能性がある。
- 2、智顛はその灌頂が提出した『法華玄義』の草稿本の内容、また第一回献上本である『三観義』、『四教義』を参照し、十乗観法の内容を総合的に見直し、第三回献上本である『玄疏』「三観解釈」を作成した。

となる。しかし一方で、「2.2 発真正心」／「5.232 明真正発心」以下の内容を比較すると、下線部の四種の即を用いた共通点はあるが、内容の進展の上からは、灌頂が『三観義』、『四教義』を参照して『法華玄義』を整理したと断定するには疑問を呈する部分もある<sup>8</sup>。講説年代から考えても、『法華玄義』は『三観義』より前に説かれたものであり、同時代に講説された『摩訶止観』にも表5下線部②、④の『大智度論』の引用が見られる<sup>9</sup>。前節で示した通り、『三観義』には六即と行位の対応関係を明示した記述がなく、三大部を参照して直接『玄疏』「三観解釈」の作成に取り組んだ可能性もある。この問題に関しては、智顛の三大部講説時代から維摩経疏作成時代までの一心三観説の発展過程を、より詳細に考察する必要がある。

### Ⅲ. 結論

以上考察してきた内容は、智顛の維摩経疏である『三観義』から『玄疏』巻二の「三観解釈」への改訂過程における「2.22 一心三観」／「3.2 明一心三観」の比較対照を中心とした、一心三観説の展開である。

既述の内容をまとめると、

- 1、維摩経疏作成以前から、六即と行位の対応関係に対する智顛の考え方には一貫性があり、『玄疏』で初めて取り入れられたものではない。
- 2、灌頂が整理して智顛に届けた『法華玄義』草稿本の円教の門における十乗観法、智顛の「三観解釈」の十乗観法、両者共に『三観義』、『四教義』を参照したと思われる内容が見られる。
- 3、智顛は灌頂が提出した三大部の整理本と『三観義』、『四教義』を参照し、総合的に判断し、維摩経疏の第三回献上本を作成した。
- 4、一心三観の修行による観行即から分証真實即に至るまで、一心三観の十乗観法の修行による観行即大乘から究竟即大乘に至るまで、一仏乗を完成させるための六即と行位との対応関係を、

<sup>8</sup> 「2.8 善知次位」／「5.238 善識位次」では、「三観解釈」は六即と行位の対応を明確にしているのに対し、『法華玄義』はすべて六即を涅槃に配して説明する等。

<sup>9</sup> 『摩訶止観』巻第三上、「仏智照空如二乗所見、名一切智。仏智照仮如菩薩所見、名道種智。仏智照空仮中皆見実相、名一切種智。故言、三智一心中得。故知一心三止所成三眼見不思議三諦」(T46, no. 1911, p. 26, b10-14)を参照。

『玄疏』の「三観解釈」で初めて明確にした。

となる。

既述の通り、詳細な考察が必要な諸問題はあるが、1～4の流れで考えると、『三観義』から「三観解釈」への改訂過程とは、『三観義』を削除、あるいは修正して教説を進展させた改変であると単純に捉えられるものではないことが分かる。宇衛康弘氏は、智顛における一心三観の展開について次のように述べている。「たしかに分量的に見れば、一心三観に大幅な減少が見られるものの、逆に教説面では、『三観義』より進展しているのである。もしそのように理解する（一心三観の大幅な削除によって、智顛が『維摩経』を別相三観に重点を置いて理解しようとするようになったとの判断）のならば、何故一心三観全体を削除してしまわなかったのか、という疑問が当然残るのである。考えられることは、別相三観について、三観それぞれを詳述すれば、一心三観においては、基本的に外せない点だけを略述するだけで理解されるのではないか、ということである。（中略）しかしこの点に関しては、速断を避けて慎重に考察してみる必要がある。」（宇衛 [1984 : 65]）としている。更に同氏は、「（一心三観に対して）六即での規定がなされており、この規定によって「証成」の意味が判然明瞭となるのである。」（宇衛 [1984 : 64]）としている。

同氏の言うとおりに、一心三観は大幅に削除されたが、『維摩経』を別相三観に重点を置いて理解しようとするようになったとの判断は、筆者の考えとしても、教説の進展とは言えないと思う。一方一心三観に対して、六即位を用いて規定していることや、本研究での内容を参照すると、智顛最晩年の『玄疏』「三観解釈」の中において、六即と行位の対応関係を整理し、一心三観の十乗観法によって一仏乗を得られる修行過程を明らかにした。このことが、『三観義』から「三観解釈」への改訂過程における最も大きな改変であり、改訂の目的とも考えられる。

## 参考文献一覧

- 宇衛康弘1984「『三観義』と『維摩経玄疏』卷二「三観解釈」の比較対照」『駒沢大学大学院仏教学研究會年報』, 通号 17, 61-70.
- 菅野博史2013「『維摩経玄疏』訳注(三)」『多田孝文名誉教授古稀記念論文集 東洋の慈悲と智慧』33-54、山喜房仏書林.
- 菅野博史2017「『維摩経玄疏』訳注(四)」『創価大学人文論集』29, 1-33.
- 菅野博史2018『智顛説 現代語訳法華玄義(上)』公益財団法人東洋哲学研究所.
- 菅野博史2019『智顛説 現代語訳法華玄義(下)』公益財団法人東洋哲学研究所.
- 佐藤哲英1961『天台大師の研究』百華苑.
- 関口真大1974『天台小止観』岩波書店.
- 新田雅章1981『天台実相論の研究』平楽寺書店.
- 野本覚成1979「『三観義』所説の法門」『天台学報』, 通号 21, 109-112.
- 宮部亮侑2011「天台智顛と六即」『印度学仏教学研究』, 通号 123, 544-549.
- 村上明也2009「天台大師の十乗観法に関する考察」『印度学仏教学研究』, 通号 119, 191-194.
- 山口弘江2005「天台維摩経疏の成立に関する一考察」『駒沢大学仏教学部論集』, 通号 36, 265-279.
- 山口弘江2010「『維摩経玄疏』と別行本」『印度学仏教学研究』, 通号 120, 597-601.
- 山口弘江2017『天台維摩経疏の研究』国書刊行会.